



昭和34年4月18日制定

# あさひ

学校便り10月号

平成26年9月30日

横浜市立旭小学校

## 「こころ」に生きる読み取りを

校長 伊藤 博夫

残暑もやわらぎ、ようやく朝夕の涼しさや草むらの虫の音が、秋の到来を告げる今日この頃です。灯火親しむ候、読書をするのに最適の季節を迎えました。

さて、読書が私たちに与える影響は大きいものがあります。それは、例え余暇の楽しみであっても、何気なく読んだなかに人物の生きざまが、ある時は自分への励ましとなったり、あるいは文中の一言が自分の歩みの指標となったりと一。

それには、本の選択も大事ですが、より大切なのは、どのように読み、それをどのように自分の日常生活の中に生かしていくかではないかと思えます。

アンデルセン童話「みにくいあひるの子」は、子どもは子どもなりに、大人は大人なりに年齢を越えて受け止める様々な問題を提起し、その時その時の読み手一人ひとりに、生き生きと語りかけてくれる作品です。また、書かれている事柄を自分や自分を取り巻く人々に置き換えて眺め、現実の問題として考えたり話し合ったりするのに適した作品です。

物語の主人公「あひるの子」は、アンデルセン自身だとも言われています。私は自叙伝としてその魅力を味わってみました。

白鳥となったあひるの子が「今までの苦しみ悲しみは、この美しい鳥になるための苦勞であったのだ。」という言葉が、たいそう強く心に響いてきます。迫害に遭いながら偉大な作家として成功していた作者が、最も世間に叫びたかった言葉のようにも聞こえます。そして、このあひるの子に対する他のあひるたち、猫、にわたりの仕打ちは、今日社会問題となっている「いじめ」そのままにもみえてきます。外観が醜いというだけであひるの子をいじめるものたちは、自分の心がどんなに醜いかに気づいていない愚かな者たちであることも一。これらが集団で行動するのは、一人だけで行動する勇気をもっていないからだということも一。

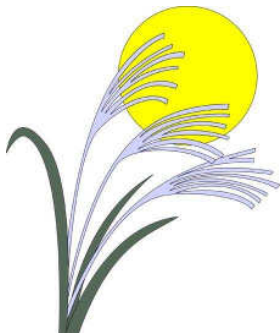
それに比べて一見弱々しいあひるの子こそ、本当の勇気の持ち主ではないかと思われてきます。自分一人の力で生き抜いていこうと、痛々しいほどの努力をしているからです。さらに、苦しみ、悲しみに打ち勝って、孤独で辛い生活に耐え抜いているからです。

けれども、長い間虐げられてきたあひるの子です。他の者に頼らない強さは、結局他の者を信じる気持ちを失っていくのでした。凍死する寸前に、親切な人間に助けられ温かい家庭に連れて行かれて手当てを受けますが、また、いじめられると思ひ込み、暴れた末に逃げ出しています。この一家の人から見れば、親切を否定されたことであり、あひるの子にとってみれば、自分しか信じられないという生活は、たまらなく惨めなことだったにちがいません。

どんなに勇気を持っていても、したたかに生きていても、心から話し合い、いたわり合える仲間や帰る家庭（安らぎの場）を持たないと、素直で豊かな心情は育っていかないのではないかもしれませんね。従って、自分の周りに「いじめ」の問題や仲間はずれの人がいた場合には、読書から読み取ったことと重ね合わせて考えてみることも大切かもしれませんね。このことが、私たちの心の掘り起こしに大きく関わるのですから一。皆さんの長い人生の中に、読書が生きて働くことを願っています。

10日で前期が終了いたします。学習のまとめとして「あゆみ」を児童が持ち帰ります。学校でも児童一人ひとりが関心を持って主体的に学習に臨むことを念頭に置いて「あゆみ」を作成しております。ご家庭でもお子様の意欲が増すような言葉がけをさせていただきますようお願いいたします。

地域の皆様、保護者の皆様、18日には運動会を実施いたします。ご来校いただき児童に温かなご声援をよろしくお願い申し上げます。



### 10月の取組目標

生活目標

落ち着いて生活をしよう

保健目標

目を大切にしよう

清掃目標

廊下や手洗い場をきれいにしよう

給食目標

食事の前後の過ごし方を工夫しよう